

小1 S 児、夏休みの言葉

—— ラジオ体操をめぐる言葉 (2)

栗原 昭徳

What Kind of Words Did Child S Use ? —— The Words about Radio Exercises (2)

Akinori KUWAHARA

S 児がラジオ体操に取り組むためには、S 児の自主的な起床と朝の挨拶から始まって、祖父を起こす、アサガオの花の数調べと記入、身支度、ラジオと体操カード準備、ラジオ体操、体操会場への往復など、一連の活動が連続する。これらの多様な活動には、じつは必ず言葉が付随しているのである。

論文 (2) では、後半のラジオ体操をめぐる S 児の言葉の記録と考察を進め、終わりに幼稚園年長時と小学 1 年のラジオ体操の比較と本論のまとめを行う。

Keywords : ラジオ体操、言葉の遅れ、小学 1 年生、夏休み

本論は、栗原昭徳「小1 S 児、夏休みの言葉——ラジオ体操をめぐる言葉 (1)」より続く論文である。前論文においては、2009 年夏のラジオ体操の導入・準備過程と 7 月末までのラジオ体操における言葉を中心に検討してきた。本論では、8 月の初旬と下旬のラジオ体操をめぐる言葉と「まとめ」を中心に述べる。

8月2・3・4日、鳥取旅行

ラジオ体操をすませて旅行に出発。2 日目は雨のため宿舎のロビーのテレビの前でラジオ体操。3 日目はペンション近くの広場でラジオ体操を行なう。

8月5日 (水曜)

S 児、K の部屋で寝る。

朝、5 時 40 分、K、トイレへ。わざと「ああ、もれそうだ！」というと、S 児がにこにここと笑う。この冗談が通じることは、家族として大変うれしいこと。

かえってきて、K「6 時になったら、起こしてね。ねむいから」といって、ふたたび目をつむって寝る。

S 児が「6 時なるよ、もうちょっとしたら、おじいちゃん」という。5 時 56 分のことであった。しばらくして、S 児の「あっ、すぎた！」という声。じつは、K の寝間の時計は 5 分ばかり進んでいるのである。この直後にラジオから「6 時の時報」が聞こえてきた。すぐに S 児が「6 時になったから、起きて！」。K「おきよう！」と、大きな声を出して起きる。

6時04分、居間へ。S児、虫かごの中を見て、「あっ、セミをにがす！」。
起きたあと階下で、K「いま、何時？」とたずねてみる。S児「6時9分!」。
K「きょうは、何日?」、S児「ええと、8月5日!」。
K「いま、何時?」、S児「6時10分!」。
K「6時10分より、1すぎると、何分?」、S児「あっ、11分!」
かなり正確に時計が読めるようになっている。
これも、夏休みのラジオ体操ならではの、時計（時刻）を気にしながらの「早起き」の成果である。

パジャマを着替える。S児「よし!」といって、着替えを洗濯機にもっていく。これも、母親や祖母の育てた生活習慣の一つである。

6時17分、S児「よし、さきに行こう!」。K「まてえ!」。

ラジオ体操からの帰り道、K「あっ、あそこ! 真っ赤なトンボがおるぞ!」。
S児「ショウジョウトンボ?」、K「そうよ。お母さんと取りにきてね」。
家に帰って、S児「ただいまあ!」、母親に「ショウジョウトンボがおった!」。
母親「どこに?」、S児「田んぼに!」。
ラジオ体操の途中で出会った虫や植物の名前に興味をもったり、名前を覚えたり、報告したりなども、夏の朝のラジオ体操の取り組みの中ならではの大事な言葉に関する活動である。

8月6・7・8日、壱岐旅行

小1女兒のいるKの大学時代の友人宅へ。8月6日、朝8時、山口発。この旅行へもラジオ体操出席カードや携帯ラジオを持参して、朝のラジオ体操を続ける。「壱岐の友だち」のものを含めて、虫取り網4本、虫かご4個も持参する。

8月9日（日曜）。6時10分、K、S児たちを起こす。

S児に声をかけると、すぐに起床。30秒もしないうちに、居間へ降りることになる。K「朝起きが上手だなあ、えらいなあ、S君」。しかし、居間に降りると、すぐに横になる。旅行で疲れている様子。6時30分、ラジオ体操。

8月10日（月曜）。ラジオ体操、続く。子ども会ラジオ体操は、この週はお休み。S児とK、自宅玄関前で、向かい合って体操をする。祖母、写真を撮る。

8月11日（火曜）。

S児、前日夕方から嘔吐。5時33分、S児と祖母が寝ている階下の居間に降りる。S児、目を覚ましていて、ごそごそしている。体調が良くないらしい。

K「寝ていてね」と声をかけて、ふたたび2階の寝間へ。

6時05分、K、起きる。居間に寝ているS児と祖母のところへ。

K「Sくん、起きたかな？ 6時30分になったら、ここでラジオ体操をしようね。さっとやって、判をおそうね」。S児「うん」。*****「ここでラジオ体操をしよう」の意味が理解できている様子である。確認のつもりで、次を問う。

K「さんせいの人、手をあげてくださあい」、S児「はあい」と挙手する。

S児「さんせいしない人、手をあげてくださあい」。

そう言って、S児、Kの前に自分の手をだす。KがS児の手をもって、挙手させようとする。しかし、Kの手がすべって、手をあげたのは、K一人だけになる。結局、賛成しないのはKひとりになった、というわけである。

そのあと、お互いが笑いあうことになる。*****これも、言葉遊びである。

6時26分、S児が起き上がる。6時28分、S児「ラジオは？」と、祖母にたずねる。ラジオのスイッチを入れると、ニュース。K「Sくん、きょうは簡単にするからね」。S児、ニッコリして「うん」。

これまでにないほど簡単なラジオ体操をすることに。両手を上げながら背伸びをする運動。両手を上げ、横にひろげて下げる運動。3番目の、両手を前で交叉させる運動。4番目には、もう、深呼吸をして、運動は終わりである。

K、まじめな顔をして「これでおわります」と言って、「気をつけ」の姿勢。

そして「れい」と言いながら、互いに礼をしあう。**簡単なラジオ体操**である。

そのあと、S児は「それじゃ、聞いてく」といったあと、横になってラジオから流れてくる「ラジオ体操」の続きを聞いている。体操カードに判を押す。

S児、この日の夜も、祖母と居間に寝る。まだ体調が良くない。

考察■さまざまな形のラジオ体操

この日のラジオ体操は、第1体操の最初から3つの種類の運動のあとで、いきなり第1体操の終わりの深呼吸である。そして、互いに「礼」をし合って、終了である。厳密に言えば、完全な1回の参加とはいえない。幼児や小学校低学年のラジオ体操では、体調や時間や場所の条件に応じて、さまざまな形があってよい。

S児の場合、夏のラジオ体操への導入時（7月上旬）には第1体操の最初の2つの運動だけで終わったこともあるし、この日のように、3つ目の運動のあと、すぐに深呼吸で終わることもある。

日ごろ、S児とK（ときに祖母）の二人だけのラジオ体操では、基本的には第1体操だけである。第1と第2の体操をするのは、地域子ども会のラジオ体操においてだけである。

場所についても、自宅前と子ども会の広場がほとんどであるが、ときにはS児とKの二人だけで宿舎のロビーや玄関前ですることもあった。

8月12日（水曜）～25日（火曜）のラジオ体操については省略

この間のラジオ体操は、S児が体調を崩した「3回」だけが、お休みとなる。

8月26日（水）

祖母の話によれば、この日、S児は5時47分に目をさました。S児は、祖母に「あっ、さきに一人で起きてもいい？ おじいちゃん！」といった。

このようないきさつがあって、5時50分にはKのふとんの中に入ってきたのであった。S児「ラジオ、つけて！」。

この声を聞いて、K、ラジオのスイッチを入れて、ボリュームを上げる。

6時の時報が鳴ると、S児「6時になったよう！」と教えてくれる。

K「おはよう、起こしてくれて、ありがとう」。

この直後、S児は隣の部屋にいて、同じように「6時になったよう！」と声をかけて、母親と祖母を起こす。これをきっかけに、4人が居間に下りる。

S児、前日に捕獲したハグロトンボを見せて、「見て、ハグロトンボが生きてたよ。ハグロトンボ、生きていたんだって!」と、自分で言いなおしている。

さらにつづけて、「ほら、見て。動いたよ。ハグロトンボさん、おはよう！」と虫かごのなかのハグロトンボにむかって呼びかけている。6時02分。

*トンボやチョウへの呼びかけは、外での虫取り時にも多用してきた。

S児、パジャマから長袖と長ズボンに着がえながら、「きょう、寒いから、走っていくの？」とたずねてくる。K「そう！」とこたえる。

時間があるので、祖母が「アサガオを見てきたら？」という。

KもS児に向かって「Sくん、アサガオを見てきたら？」

ドアを開けたS児が「あっ、れいこ（0個）！ 咲いてない」と声をあげる。

K、玄関前で靴のひもを結びながら、K「あの雲は、なにかなあ？」とたずねてみる。S児、即座に「すじぐも！」と教えてくれる。

前日の朝の「羊の大群」のような雲ではなくて、うすく刷毛ではいたような、薄く白い筋が何本も見える。

子ども会のラジオ体操の会場着。S児「おらんねえ。おらんねえ、友だち」という。最初は、背の高い高学年の児童ばかり5～6人であった。

しばらくすると、前日の4人の女兒たちもやってくる。

しっかりしたリーダー格の女兒にたずねると、自分は1年で、ほかの3人は「幼稚園、2年、2年」と教えてくれた。S児とは同じ組で、自分は「18番」、Sくんは「31番」とも教えてくれたのであった。子ども独特の記憶力の良さに、感心させられる。

ついでに、1学期の5月13日の1年4組の授業参観日のことをたずねてみた。

K「初めての参観日のときに、「り」を勉強したよね」というと、その女兒は「うん」と応えてくれた。さらに、

K「「り」のつく言葉で、「りぼん」「りんご」がでてきたよね。Sくんが手をあげて「リレー」といったら、だれか男の子が「なあるほどう！」いうたよねえ。あの男の子は、だれ？」と質問してみた。

すると、その女兒の口から「S・Rくん」と、男の子の名前が返ってきた。子どもたちは、授業のなかで発表された言葉も、発表した子どもの名前も覚えているのである。この事実にも、感心させられる。というのは、105日前の授業の中の、ほかの子どもの、何気ない言葉を、確実に覚えていたからである。

この日のラジオ体操の参加者は27名。S児は、最前列の4人の女兒たちの横にくっついて、5人で1列になってラジオ体操をしたのであった。

帰りには、この日も、三叉路まで、走って帰った。

みんなで「さようなら」をいって、わかれたのであった。

女兒の一人は、同じクラスの「Jちゃん」とのことで、S児が横から近づいて、その子の腕に触れようとしたことは、わかった。6時47分。

この日、4人の女兒が、いちばん前に1列に並んで体操の準備をしはじめたので、K「Sくんも、あそこに並んで体操をしたら？」とすすめた。すると、最前列の5人目に並んだ。このS児の行動は、Kの言葉がきっかけであった。Kの話し言葉を理解した上での行動である。S児は、ときに、Kの方を見ながら、ラジオ体操を終えた。

8月27日（木）

この日の朝、S児が、自分で起きたとのことである。

K「何時に起こしてくれたの」、S児「6時1分」と教えてくれる。

S児「行こうや」と、Kをラジオ体操へさそう。K「さあ、行こうか」。

S児、母親と祖母に対して、「ほいじゃ*、行ってきます」という。

*印をつけた「ほいじゃ」とは、祖父母がよくつかう山口県の方言で「それでは」というほどの意味の言葉である。

祖母「『それでは』って、言って！」とうながす。

S児「それでは、行ってきます」。

祖母の言葉だけの抽象的な指示ではあったが、理解できている様子である。

曇り空。S児「きょうは寒いから、走って行こう」と、Kに呼びかける。このような積極的な言葉を、S児の口からは初めて聞くことになった。二人で並んで走る。三分の一（約150mあまり）走ったところで、K、歩きはじめる。

S 児「あっ、もうちょっと走る。おじいちゃん、走って!」と、さらにKをうながす。入学前後のころ、走るフォームも定まらず、どちらかといえば、ふらふらと左右に揺れながら不安定な走り方をするS 児であったが、体力と気力がついたことに驚くことに。夏のラジオ体操の成果の一つであると評価したい。

散歩をしている人に出会うと、K「おはようございます」。S 児も「おはようございます」。二人の人に挨拶することに。*これも話し言葉である。

ラジオ体操会場につく。時間があるので、前日と同じように、白いアサガオを数える。花のところに近づくと、1匹の虫が飛び出して、S 児の首にぶつかって、飛んでいった。S 児、驚く。どうやら、カナブンらしい。しばらくして、S 児「びっくりしたねえ*」とKを見ながら、言う。

* 予期せぬ事態での「とっさの言葉」である。この「とっさの言葉」は、それ以前に自分の「既知既済の言葉」になっていないと、すぐには出てこない。S 児の幼稚園時のこと、棚の上からS 児の目の前に小さな物が落ちて、時ならぬ音がした。そのときS 児が発したのは、「ああ、びっくりしたあ!」であった。この場に立ち会うことになったKは、S 児の「言語習得の可能性」を確信した。

Kが、葉っぱのかげに隠れている花を指さしながら、最初はゆっくりと「1、2、3」と数えはじめる。前日の朝よりは少なく、全部で15輪ほどであった。

考察■多様な環境からの選択的行動

ラジオ体操は、散歩や虫取りと同じように、義務ではなくて、S 児と保護者が選択して取り組む自主的な活動である。だからこそ、そこには自由があり、S 児の興味や関心しだいで様々な活動に取り組むことができる。

また、保護する側からいえば、保護者自身の選択の仕方しだいで、子どもたちに適合する多様な環境に目を向けさせることができる。それも、大きな自然環境の偶然に左右されるので、同じような夏の朝でも、一つとして同じ事件は起こらない。様々な体験をすることができる。

前回数えたときには、20いくつだったので、K「15と23は、どっちが多い?」とたずねてみた。S 児「15」と言ったあと、「あっ、23」と言いなおした。ついでに、K「17と20は、どっちが多い?」という問題も出してみた。S 児は「20!」と答えた。

どうやら、20前後の数の違いは理解できているようだ。

「ラジオ体操の歌」がはじまる。

最前列にならんだ1年生たち、5人がカードの歌詞を見ながら歌っている。

とくにS 児と同クラスの女兒は、大きな口をあけて、体でリズムをとりながら歌っている。S 児も、カードを見ながら歌っている。

祖母からの情報によると、体操カードを見ながら「ラジオ体操の歌」を歌うという方法は、S

児がやりはじめたらしい。

この日の参加者は、30 数名である。そのうち、大人は 6 名であった。

体操が終わると、判を押してもらうために、子どもたちは 1 列に並ぶ。S 児の並び方も、すぐに他の子どものうしろにくつつくようにして列をつくる。最初よりは上手になった。

S 児「押してもらったよ、ここ！」とあって、Kに見せてくれる。

帰りは、4 人の元気のよい女兒たちと走って帰ることに。S 児は、同じクラスの女兒に近づきたい様子。三叉路の分かれ道で、その女兒が「じゃあね」と声をかけた。S 児は「バイバイ」と返事をする。

Kは「さようなら」と声をかけた。4 人を連れてこられた父親と思われる方にも「お世話になりました」と声をかける。

6 時 50 分に帰宅。外出から帰ったときの、S 児の「手洗い」のようすを、祖母に見てもらうことに。水だけで洗う、消毒用せっけんをつけて両手で泡立てるようにして洗う。

そのあと、湯を出しながら、1 から 10 まで数えながら両手で石けんを洗い落とす。

「よく洗って」や「石けんを洗いおとして」というよりも、この「1 から 10 まで数える」方が、幼稚園児や小学校低学年児童には、わかりやすいようだ。

S 児たち 3 人は、朝食。Kはシャワー、身支度のあと、7 時すぎ、自宅発。この日も玄関の小窓から見送ってくれる。7 時 25 分、研究室着。

8 月 28 日（金曜）

① 5 時 37 分ごろ、S 児が「おじいちゃんのところへ、行ってもいい？」と、そばで寝ている祖母にたずねたとのこと。祖母は「いいよ」とこたえた。

5 時 40 分、S 児がKの部屋にやってきて「ちょっと、寝らせて！」という。

K「いいよ」とあって、ふとんの横に寄る。S 児が寝るスペースをつくる。

S 児、この日も子ども会のラジオ体操にいくつもり。

② K「S くん、子ども会のラジオ体操に行って、「ラジオ体操おどり」をしないでよ」と、いまのS 児には絶対にありえない冗談を言ってみる。

しかし、自宅の布団の中では、さっそく二人とも寝たまま「ラジオ体操おどり」の動きをしはじめる。

この「ラジオ体操おどり」は、S 児とKのあいだだけで通用する言葉である。

本来の体操をしないで、ラジオ体操のリズムに合わせて、4 拍子のリズムをとりながら、体のまん中で「両手を 2 回ほど打ったあと、両手を右上にあげ」、そのあと、また「両手を打ったあと、左上にあげる」という、なんとなく盆おどり風の、愉快的体の動きになるのである。

この動きを、寝たままの姿勢で、しばらく楽しんだのであった。

③ 絵本『ハメルンのふえふき』を二人で読む

5時42分、S児が寝間に置いてあった本箱の中の絵本を探しはじめた。

『ハメルンのふえふき』をもってきた。この本を読むことになった。

最初のページは、**1文ごとに、代わりあって読む**ことになった。

始めのうちは二人で代わりあって読み進めたが、S児が疲れると、Kがほとんどを読んで、とうとう終りまで読み終えた。

読み終えるまえに、6時の時報が鳴って、S児の気持ちがラジオ体操の方に向かったが、ひきとめて、**どうにか読み終えた**。

読みおえると、S児は、すぐに「よし、起きよう！」と、はっきりとした声で言ったのであった。6時03分のことであった。

* Kと布団の中で繰り返し読んできたのは『お魚図鑑』であったが、初めてS児自身の意志で他の本を持ってきた。しかも、1冊を読み終えたのであった。

④ 6時15分、アサガオを見に。

そのまま玄関で靴をはきはじめたKに、S児「待っててね」。

居間にいる祖母に、S児「きょうは、咲いてなかったよ。きょうは0個」。

S児、玄関に出てくる。しかし、ラジオ体操のカードを忘れていたS児が「あっ、ラジオ体操出席カード」と言った。いわゆる「ラジオ体操のカード」なのだが、とっさの言葉として「**ラジオ体操出席カード**」と、フルネームを言ったことに、感心することになった。

S児は居間にいる祖母に、持ってきてもらおうとして声をかける。この時も、「おばあちゃん、ラジオ体操出席カードをくださいあい」と、フルネームであった。

祖母「今日が、最後だからね」、S児「子ども会のラジオ体操？」とたずねる。

祖母「そうよ」。二人の間で、きちんとした会話が成立している。

この日は曇り。山側の空には、黒い雲。6時19分、遠くから雷の「ゴロゴロ」と鳴る音。K「かみなりだ!」。S児「かみなりぐも!」。K「あれかもわからんねえ」、S児「こわいねえ」という。S児とKの間でも会話が成立する。

6時23分、ラジオ体操の会場にちかづく。人の姿が見えない。

S児「友だち、まだ、寝てる?」と、Kにたずねる。

さらに近づくと、人の姿が見えはじめる。S児「あっ、来てる!」

6人の高学年の児童が来ている。*これも「とっさの言葉」である。

会場近くの田んぼにトンボがいないか、二人で見に行く。

S児「あっ!」と声をあげて、前に進む。車に近づいて、「ラパン!」といった。車の名前である。

6時25分。*この時期、S児は車の名称に関心をもつ。

田んぼから引き返すとき、K「なに?」と、1台の車を指さしてたずねた。

即座に返ってきたのは「コルト、みつびしの」であった。

6時29分、4人の女児がやってくる。幼・1年・2年・2年の4人の女児である。ラジオ体操の音楽が聞こえはじめる。S児が「あっ！」と声をあげた。

そして、Kがうながすと、最前列にならんだ4人の列の5人目に加わった。

それにしても隣の女児との距離がちかすぎて、手があたるので、K「手があたらないように、広がって！」と声をかける。

5人が、カードを見ながら、「ラジオ体操の歌」を歌う。

この日は、子ども会のラジオ体操の最終日とあって、総勢40人。大人も10人くらい。ラジオ体操がおわると、すぐにS児も、判を押してもらう列にならんだ。*この並び方も、前の人の後ろについて、上手になった。

判を押してもらうと、S児「判を押したよ」といって、Kに見せに来る。

このあと、ご褒美の缶ジュースを1本もらう。自分で持って帰る。

帰るとき、4人の女児が走って、追いぬいていく。

休んだあと、もう一度、「さあ、走るよ、もう一度」と言っているのは、S児と同じ1年4組の元気のよい女児である。

5人が走っていく。Kも走る。

三叉路で、おたがいに「バイバイ、さようなら」を言い合って、別々の方向に。女児の父親と思われる方とも、遠くから互いに会釈を交わすことに。

畔道が終わって自宅に近くなったころ、大きな雨粒が、落ちはじめた。

そのうちの一粒でもあたったか、S児「あっ、はげしい雨になった」。

けっして激しい雨ではないが、雑誌の付録の雲のカードのなかの「かみなりぐも」の記述と関係する言葉なのであった。6時49分、帰宅。

8月29日（土曜）S児と登校練習。

S児、前日の祭で、寝るのは21時30分ごろになった様子。

それでも、朝には「6時だ！」とあって、自分で起きたとのこと。

すぐに、Kのところへ。すこし眠そう。階下へ降りて、6時05分、S児「ラジオ体操、やる？」
K「一人で、やる？」、S児「おじいちゃんと、やる！」。

S児の予定

6時07分、S児が、この日の自分の予定を言いはじめる。

S児「ラジオ体操をしてえ、ごはんを食べてえ、おようふくを着がえてえ、歯みがきをしてえ、きのう見たDVD、新幹線のDVDを見る」と一挙に、ラジオ体操と、そのあとの予定を言った。

時間があるので、祖母にうながされて、アサガオの観察と、表への記入。
書きおわると、S児「あっ、ラジオがない！」
母親に見つけてもらって、すぐにスイッチを入れて、音をだす。6時12分、
この夏のラジオ体操では、終始、S児がラジオの準備と操作を担当した。

まだ時間があるので、昨日から読みはじめた『ハメルンのふえふき』の1ページ目を、S児が音読する。6時20分、23ページ目は、Kが質問をしながら、ネズミの数を数えたり、足し算をしたり。絵も楽しむことに。

6時22分、S児「ラジオ体操の準備しよう！（服装は）このまま？」
K「うん」。Kも、起きたときのままで、玄関前でラジオ体操。

朝のラジオ体操で体力を使っているので、「登校練習」ではなくて、車で小学校に行くことを考えたのだが、取りやめ。Kの予定では、8月30日と31日の2日を、2学期へ向けての「登校練習の日」にすることに。

8月30日、夏休は、あと2日

この日のKの予定では「S児と登校練習」と書いてある。この日、1日のうちのどこかで、S児と二人でY小学校へ出かけて、2学期を迎えるための「登校練習」をしようと目論んでいたのがあった。しかし、地区子ども会のラジオ体操は終わっている。そこで、足をのばして、S児とY小学校に歩いて行って、Y小学校の運動場でラジオ体操をすることを考えた。このことを、深夜に思いついて、メモしおえたとき、1時の時報が鳴ったのであった。

朝5時45分、トントンとドアのノックの音がして、S児がやってくる。

あとで祖母から聞くと、5時45分にS児が「おじいちゃんのとこへ、行ってもいい？」とたずねたという。即座にやってきたのであった。

「夏休みには6時に起きて、おじいちゃんを起こす」というルールを続けるためにも、筆者は「ちょっと、寝とってください」と布団の中に招き入れた。

昨日は「寝せてください」といって、部屋に入ってきたので、K「Sくん、寝せてください、じゃあないの？」と訂正させることに。

S児、ふとんの上に寝転ぶ。寒かったのか、鼻を鳴らしているので、部屋の窓をしめる。5時46分、ラジオから、SLの汽笛が聞こえてきた。

S児「あっ、エス・エルの音！ ポーッというた！」。*とっさの言葉である。

しばらくして、再び汽笛の音が聞こえてくる。S児「あっ、またエス・エルの音！」。6時48分、K「6時になったら、起こしてよ」と、たのむ。

S児「はあい」と、明るく、とても良い返事。

ラジオから、6時の時報の音。S児「あっ、6時だ！」そのあと、Kに向かって「6時だよ！」

という。さらに、Kの聞いていた「ラジオ、消して！」。

S児とK、そして母親も祖母も、1階の居間におりにすることに。

この日、8月30日は、夏休みも、残りが、あと2日である。

そこで、この夏休み中、ほとんど毎日つづけてきたラジオ体操を、Y小学校へ行ってすることを考えついた。そこで、祖母に向かって、

K「きょうのラジオ体操、Y小学校まで行ってするからね、Sくんは、このごろ、走るのが上手になったからね*」と伝える。

考察■間接的評価の効用

Kからの褒め言葉「Sくんは、このごろ、走るのが上手になったからね」が、祖母に向けて発せられたとき、同時にS児の耳にも届いている。S児の良さについての発言であるが、向けられた相手は祖母である。S児は、直接的にKの言葉を聞いているのであるが、形としては間接的に受け取っているのである。

褒め言葉は、直接的に当の子どもに言うのも、もちろん効き目のある言葉である。しかし、間接的に届くと、その言葉の効力は倍加する。

祖母の顔を見ると、驚いた様子であったが、昨日の「登校練習」が、実現できなかったので、すぐにKの意図を理解してくれたようだ。

S児も、びっくりした様子であったが、行く気になってくれた。

S児「ねえ、このまま（寝るときに着た服のまま）にするよ」という。

ラジオ体操をすれば、すぐに汗をかくので、そのままの服装でラジオ体操をすることになっていた。祖母「帰って、着がえなさい」

S児も「帰って、お洋服になる」とつけくわえた。6時08分。

祖母「そのまえに、アサガオ、見なさい」

S児、玄関前に置いてあるアサガオを見に行く。

「あっ、咲いてなかった！ 0個（ゼロこ）よ」と声をあげる。

居間にもどってくると、S児、さっそくアサガオの表に、「30」「0こ」と鉛筆で記入する。この「30」とは、この日の日付け「8月30日」のことであり、「0こ」とは、この日に咲いたアサガオの数である。

この表への記入がおわると、S児の口からは「よし！」という、きっぱりとした声が聞こえてきた。

6時09分、S児もKも、靴をはいて出かけることになった。

母親が「行ってらっしゃい」、S児「行ってきます」。

祖母も、外に出てきて「いってらっしゃい」。

S児「あれ、ラジオは？」という。

K「おじいちゃんが持っているからね」

小さな携帯ラジオは、Kのポケットに入っている。

自宅を出て、4軒の家の前を通ると、車の通る大きな道に出る。

K「ここで、おねがいします」と、道路をわたるときの注意をしてもらうことにした。S児が、右手をあげて「右よし、左よし、右よし」の声をだした。

小学校までには、大きな道路の横断が3回ばかり、地下道の通過が1回ある。

S児が走り始める。すこし続いたので、K「待ってくれ！」ということに。

S児は、Kの前を走っていく。

夏のあいだ青々と育っていった稲も、この日には刈られて、田んぼには黄土色の株の列が見える。

K「イネが刈ってあるよ。イネが刈ってある、言ってごらん」

S児「イネが刈ってある」

K「そう、もう1回、言ってごらん」

S児「イネが刈ってある」、K「って、言うんだよ」。

*初めての言葉は、繰り返すことを心がけてきた。

このあと、S児が「あっ！」と大きな声をあげた。

そして「太陽！」といて、指さした。

見ると、屋根と屋根のあいだから見える山のうえに、朱色に染まった大きな太陽が見えていたのであった。Y小の運動場の向こうにも、太陽は見えたが、すでにまぶしいほどの輝きとなっていた。

真上の空には、青色をバックにして、秋の雲が出ている。

K「Sくん、あの雲、何か知ってる？」

S児「うろこぐも？」と、たずねるような口調でいう。K「そう」。

S児「いま、何時？」。K、腕時計を見せる。

S児「6時15分？」、K「そう」。

「デデポッポポー、デデポッポポー」の鳴き声は、近いところから聞こえるのだが、どこにいるかわからない。S児「すがたが見えない*」という。

*物の名前ではなくて、様子をあらわす抽象的な言葉が使え始めている。

K、移動しながら、頭の上を探す。電柱の上にいるので、見えづらい。

K「あそこ！」と指さす。S児も、どうにか見る事ができた。

K「名前は、何？」とたずねてみる。S児「キジバト?」。このときも、たずねるようにして、言った。

ついでに、いつも朝起きて聞いていることを、たずねることにした。

K「Sくん、きょうは、何日?」、S児「30日」。

K「何月?」、S児「8月」。

K「何曜日?」、S児「ええと、ええと。何曜日かなあ。ええと、日曜日」。

「いわなが歯科」、ひらがなと、漢字の読みを教えることに。

駐車場の車を見て、S児「あっ、デミオ・スポーティー」。

K「これは?」、地下道の入り口の文字を指さす。「朝倉中央地下道」

S児「あさくら・ちゅうおう・ちかどう」と発音する。

地下道をでるとき、出口に書いてある「朝倉中央地下道」の文字を、もういちどS児に読んでもらう。

道路の向こうに「〒」のマークのある建物が見える。

K「Sくん、この建物は何か知っとる?」

S児は、即座に「ゆうびんきょく!」と応答する。

S児「じゃあ、走って行こうか!」とあって、走り始める。

しばらくして、「ワゴン・アール!」とあって、止まった。

車を見るためである。

S児、ふたたび「よし、走って行こうか!」とあって、走り始める。

6時25分、Y小学校前の横断歩道につく。S児「いま、何時何分?」。

K「見てください」とあって、腕時計をS児の目の前に。S児「6時25分?」。

K「おしてください」。S児が横断歩道のボタンを押す。「おまちください」の表示。K「手をあげようか」。S児、右手をあげ「右よし、左よし、右よし」。

正門の文字を読むことに。文字は「山口市立 Y小学校」。S児、すぐに声に出して読む。そのあと、Kが指さす文字だけを読んでもらうことに。

「小学校」を指さすと、「しょうがっこう」。「市立」を指さすと「しりつ」。

「湯田」を指さすと、「ゆだ」。「山口」を指さすと、「やまぐち」と読んだ。

正門から学校の敷地の中に入る。

S児「いないねえ、友だち。どこで(ラジオ体操を)やるの?」

K「この（玄関の）前でやろう」

S児、ラジオのスイッチを入れる。音が出る。

このあと、K「校長先生のお部屋は、どこ？」とたずねてみる。

S児「ここ！」という。しかし、その部屋の中には、たくさんの机や椅子がある。K「ここは、先生方のお部屋だよ」

S児「職員室？」

K「そう、職員室。むつかしい言葉を知っているんだなあ」

さらに、となりの部屋を見て、K「この部屋、ソファがあるよ。ここが校長先生のお部屋よ」と教えることに。

6時30分、ラジオ体操の始まりの音楽。S児「あっ、ラジオ体操の歌」と声を出す。カードの歌詞を見ながら、二人で歌う。

ラジオ体操は、二人のときはいつもそうするように、第1体操だけで終わることにした。

6時36分、ラジオ体操をおえて、プールのあったところへ。じつは、プールは新しく作り直すために、取り壊されて更地になっている。

S児「おさめ会になったプール！」という。

K「プールがないぞ!」、S児「おさめ会、した」と教えてくれる。

正門をでるとき。学校の建物へ向かって、K「学校さあん、また、あしたSくんが来ますからねえ」と声をかける。それとなく、翌日の計画を知らせる言葉でもある。S児「あした、31日？」と、Kにたずねる。K「そうか、あしたも来ようか」。S児、うなずく。

空を見上げると、青い空をバックに、秋の雲が出ている。

K「あれ、何?」、S児「うろこぐも!」という。

K「(雲が)つながるとるからね。あれが、ひとつひとつヤギさんみたいになったら、何かな?」。S児「ひつじぐも!」と応える。

6時41分、車道を走っていった車を見て、「エイゼル・オフロード」という。

途中の橋のうえから、前田川をのぞく。S児「ハグロトンボ!」と教えてくれる。K「何匹ぐらいいるか、数えてごらん」。

はじめ、Kが指さしながら「1、2、3」。10まで数えることに。

帰りながら、S児「ハグロトンボが、おったねえ」

歩きながら、S児がKに話しかける。「産卵しないよねえ、ハグロトンボのオスは。メスは、産卵するの?」。K「そうよ!」。*昆虫図鑑の知識である。

S児「さっき見たスポーティーを見よう！ シートの中も見ようね。スポーティーブラックか見よう！」

地下道を通るとき、S児「なんか、お化けがおるみたいねえ。よし、助けてあげようか」とのこと。

S児、車の近くに行き、「あっ、スポーティー！」、さらに「スポーティーブラックだ！」

K、ナンバーの文字を指さす。S児「なにわ」と発音。

K「なにわ、っていうのは、大阪の車だよ」

S児「エスティマ・ハイブリッド。これが大好き！」

もういちど、この名前をくりかえす。

6時49分、S児「これ、大きらい！」

K「なんという車？」、S児「〇〇〇！」という。

ご老人が一人、道路の奥まったところで体操をしておられる。

そのすがたをみたS児、「あっ！」とこえをあげる。にっこりする。

同じように体操をされていたので、親しみをもったか。

通り過ぎたあと、もういちど、見に行く。

ご老人、ニッコリとしてくださる。

K、会釈をする。このあとS児「(体操を)しとったねえ」という。

もうすぐ自宅への曲がり道で、S児「もう、ごはん食べてる？ ポチャン*、した？」とたずねる。食事は終わったかもしれないと心配の様子。

K「待ってるよ」

*「ポチャン」とは、食事が終わったあと、自分で台所の流しまで持っていくことを指している。置いてある容器に入れるとき、「ポチャン」と音がするからである。S児は、食べ終わった食器を、自分で流しまで持って行って片づけることになっている。6時57分、S児「ただいまあ」

8月31日（月曜）夏休み最終日、S児と登校練習（2回目）。

6時の時報の直後に、S児がやってくる。K「ちょっとだけ寝たら？」と、S児を布団に誘う。

布団の中に入ってきたS児が、横になったまま、両手で2回ほど拍手して、両手を右上に、つづけて2回拍手して、こんどは両手を左上にもっていく。

S児とKの二人のあいだで「ラジオ体操おどり」と名づけている愉快的な遊びである。ちょうど部屋の前を通りかかった祖母にも、母親にも見てもらう。

そのつぎは、「オジラ体操」である。この「オジラ」は「ラジオ」の反対（逆さ）言葉である。このオジラ体操は、1、2、3、4のラジオ体操のリズムに合わせて、右手で目の前をこする動作で泣く真似をしたあと、こんどは左手で泣く真似をする。この動作と「えんえん」という泣き

声が、S児は得意である。

見ている大人3人はもちろんだが、本人も笑うことになる。

登校練習。6時15分、小学校への登校練習をかねて、朝のラジオ体操へ。

大きな道に出て、二人で走り始める。S児、Kの前を走る。両手をかまえて、しっかりとした足の運び。K、S児の足腰がしっかりしてきたことに、驚くことに。これも、毎日のラジオ体操が影響していると考えている。

この日、小学校の運動場には、100人ばかりの児童と大人が集まっている。

S児に、前に行って並ぶように伝える。ラジオ体操のとき、S児の手の動きは大きく、ピョンピョンとリズムカルにジャンプするときは、前にならんだ子どもたちの中では、どの子よりも高い。夏休みのあいだ継続したからである。

替え歌

夏休み最後のラジオ体操に出席した子どもたちには、ご褒美の缶ジュースが1つずつもらえることになった。他地域の子どもではあるが、S児も缶ジュースをもらった。帰り道は、さすがに疲れた様子である。国道9号線の地下道を抜けて、わずかに上り道となる。

足取りは落ちてはいるが、S児は缶ジュースをしっかりと持っている。自宅までは、まだ3分の2の距離が残っている。その地点で、S児の手の缶ジュースを貸してもらって、Kが「ラジオ体操の歌」を歌うことにした。

「あたらしい 朝がきた きぼうの朝だ
よるこびに 胸をひらけ 大空あおげ」

ここまでは、いつものラジオ体操のうたの歌詞のとおりである。

そのつぎの「ラジオの声に 健やかな胸を」の部分は、長くなるし、歌詞の意味も難しいので、歌わないことにした。

このあとは、「この かおる 風に ひらけよ、それ 1、2、3」であるが、この部分を替え歌にして歌ってみた。

「この ジュースは おじいちゃんが飲むよ、それ 1、2、3」である。

S児にすれば、自分が持っていたジュースを、いきなり「貸してくれ」と言われ、そのうえ「おじいちゃんが飲むよ」とまで言われたのである。この替え歌に慌てたのは、S児である。S児は、大きな声で「いやいや、いやいや」と反対の声をあげた。すぐにKの手からジュースをとりかえた。そして「このジュースは Sくんが飲むよ」と、Kの歌った歌詞を変えて、歌ったのであった。

Kは、もう一度S児の手から缶ジュースを取って、もう一度「このジュースは おじいちゃんが飲むよ」と歌った。そのあと、S児が反撃の歌を歌った。

K、この替え歌の歌詞を歌いながら、K自身が感心することになった。

この「ラジオ体操の歌」の原作の第1行は、「新しい朝が来た 希望の朝だ」と夏の朝の清々しさを表現しているのであるが、この「朝」の部分に「ジュース」を入れて歌うと、「あたらし

い ジュースが来た きぼうのジュースだ」となる。そのジュースというのは、今朝のラジオ体操でもらった「新しいジュース」であり、S児にとっては、日頃はあまり飲むことのない、文字通りの「希望を与える」大好きなジュースなのである。

そのあとにつづく「よろこびに 胸をひらけ 大空あおげ」は、「ジュースをもらった喜びに 胸をひらけ 大空あおげ」とスムーズに理解できるのであった。偶然とはいえ、この替え歌の意味するところが、ラジオ体操の最終日の達成感と喜びにマッチしているのであった。

この替え歌を3度も4度も繰り返すうちに、二人は楽しくなって、とうとう玄関のドアを開けるまで、元気に行進しながら帰ることができたのである。

学校から1.1kmの地点からの替え歌遊びであった。帰り道の半ばから家に着くまで、この歌が繰り返された。

わずかではあるが、帰り道は上りになっている。ラジオ体操に加えて2kmの徒歩で疲れていたS児も、この替え歌で俄然元気をとりもどすことになった。

帰宅後の朝食の途中でも、この歌が話題になった。

食事もおわって、その日の8時10分には、歌は次のように変化していた。

「あたらしい ジュースが来た、 きぼうの ジュースだ。

よろこびに 胸をひらけ、大空あおげ。(あいだは抜かして)

このジュースは おじいちゃんが 飲むよ

(ここでS児は大声で「飲まない」と歌う)、

それ 1、2、3 (ここでも、S児は「それ、 1、 2、 飲まない」)と歌った。

朝食あとは、夏休み直前から記入してきた「あさがおの花の数」の表のまとめをすることになった。(8時12分～8時47分)

翌日から2学期が始まり、S児は6時20分に起床して、元気に登校した。

■追記

本論執筆中の11月17日(火曜)から20日(金曜)までの4日間、S児の学級もインフルエンザのために学級閉鎖となった。その週末の土曜、日曜に加えて勤労感謝の日も入れると、連続7日間の休みが続くことになる。S児がテレビ番組の「どらえもん」を視聴しているとのことを聞いていたので、休みの最初の日の午前中に、思いきってシリーズものの『どらえもん』の第1巻を買って帰った。

マンガ『どらえもん』の表紙を見せると、S児は喜んで受け取って、ページをめくりはじめた。さっそく裏表紙に、S児の名前も書いた。初日は、全体をめくって見ていた。しかし、2日目午前中には前日の続きを声に出して40分ほど読んだ。さらにその続きを、午後の2時間40分をかけて、声に出して読む。結局、2日のうちに、1冊の始めから終わりまでを読みとおしたのであった。

そして、幼稚園時の「アンパンマン」の人形を「どらえもん」と呼び、自分は「のびた」にな

りきった。たとえば、「ほく、のび・のびたよ」とか、「のびたと呼んで」などと頼んでくる。また、Kが「いまから出席をとります。のび・のびた君！」と呼名すると、S児は「はあい」と挙手しながら、元気な男の子の返事をする。つづけて、Kが「どらえもん君！」と呼ぶと、すぐに縫いぐるみ人形のところへ行き、その人形の手をあげさせながら「はあい」とかわいい声に変えて返事をしてくれる。*「どらえもんごっこ」の会話が成り立っているのである。

数日のうちに、S児はマンガ『どらえもん』を読みながら、にこにこ笑うようにもなった。吹き出しの言葉の意味を理解できたからである。

11月29日（日曜）12時ごろ、S児から「どらえもん」と紙に書いてくれと頼まれた。Kは、メモ用紙に、ひらがなで「どらえもん」と書いたのだが、S児の口からは「ドラはカタカナ、えもんはひらがな」と、はっきりとした言葉が聞こえてきた。正しい「どらえもん」の名前の書き方はS児から教えてもらうことになった。

もう一つ、「ラジオ体操の歌」の替え歌についても後日談がある。

この替え歌を歌いはじめたのは、最終回のラジオ体操に行った8月31日のことであつたし、2学期に入っても何度も歌うことがあつた。歌いはじめて80日も経過して忘れたころ、偶然にも、この歌が繰り返されることになった。

11月22日（日曜）の夕方、NHKラジオを聞きながら新聞を読んでいると、久しぶりにS児が布団の中に入ってきた。この日、S児は朝から卒園した幼稚園の地域の祭に出かけて、1日中楽しかったらしく、疲れて帰ってきた。入浴のあと、やってきたのであつた。手に持っていた模型の新幹線を見せて「E系新幹線あさま」とか、「ながの、かるいざわ」などの言葉を教えてもらった。

そんなことをしているとき、ラジオから「ラジオ体操」という言葉が聞こえてきた。夕方のNHKラジオ放送で、「世界の体操」を外国に在住する日本人が報告するという番組であつた。アナウンサーが「日本のラジオ体操のような体操は、外国にあるのですか」とたずねている。その中の「ラジオ体操」の言葉を聞きつけて、S児が「ラジオ体操の歌」を歌おうと。Kを誘つたのであつた。S児が手に持っていた模型の新幹線が「ジュース」の代わりになった。このジュースを取り合つては、「新しいジュースがきた」の替え歌を歌うことになった。

30分間も楽しんだあと、S児は、そのままKの布団の中で寝てしまった。S児は、母親と祖母の二人に抱えられて、となりの部屋の自分の布団に運ばれた。

■まとめ

この「夏のラジオ体操をめぐる言葉」をふり返るとき、まず注目しなくてはならないのは、S児が自分の力で起床することができていたという事実である。この自主的な起床が、ラジオ体操の大きな原動力になっているからである。

S児の朝起きに関しては、S児との同居以来3年8カ月の間、共に規則正しい生活を続けてきた祖母や母親が大きく貢献している。早起きのコツは、じつは「早く寝ること」にある。そのため、下校のあとの「おやつ」と宿題にはじまって、翌日の日課表揃え、夕食、入浴、テレビ視聴や遊び、「おやすみなさい」の挨拶に至るまでの諸活動がスムーズに流れていかななくてはな

らない。この「生活リズム」の育成に、家族をあげて努力してきたことが、いちおうの成功を見ているのである。

S児の朝起きを促進した物的環境としては、家の中に置いてあるいくつかの時計を挙げなくてはならない。S児たちの寝間のデジタル時計は、S児が最初に利用した時計である。この時計の文字盤が6時を示すときの「カチッ」という音を聞いて、すぐに起床するのであった。のちには、居間のアナログ時計、洗面所と食卓の前に置いてある小さな時計も、読めるようになり、役立てるようになった。

この時計を見る習慣は、ラジオ体操だけではなくて、下校後の生活にも生かされる。たとえば、11月中旬の時点では、「3時30分に、宿題する」、「6時30分に、風呂に（湯を）入れる」、「7時に、（テレビ番組の）〇〇、見る」などのような時計の使い方をしている。ここでも、時間や時刻に関する知識が「話し言葉」の形で表現されていることが分かる。

2008年度の幼稚園年長クラスの夏休みのラジオ体操と、2009年度の小1の夏休みのラジオ体操の違いは、以下のとおりである。

- ・朝起きは、自分で時計を見て「6:00」に起きる。
 - 6時まで目に目がさめていても、起きないで「6:00」まで待つ。
 - 6時を過ぎて起きたときには、「すぎた！」と遅れたことを意識できている。
 - *以前と同様に、いっしょの部屋に寝ている母親と祖母の3人で、布団の上に正座して「おはようございます」の朝の挨拶をしあう。
- ・隣の部屋で寝ているKを「6時になったよう」と起こす。
 - この朝起きのときのS児の仕事は、2009年11月末現在でも続いている。
 - いまや、S児の1日の始まりとその後の活動の原動力になっている。
- ・ときにKの布団の中で遊ぶことがあるが、時報が鳴ると、「ラジオ体操！」とKに促して、自分の役割を忘れていない。
- ・時計を見ながら、洗顔や着替え、運動靴をはくなどの準備ができる。
 - 登校のための準備も、時間を意識しながらできている。
- ・ラジオ体操出席カードを出して、忘れずに自分の首にかけて持参する。
- ・ラジオ体操に必要な携帯ラジオを準備して、自分でスイッチを入れる。
- ・ラジオ体操の始まりの時刻に注意して、Kに「始まるよ」などと促す。
- ・時計を見ながら、洗顔や着替え、運動靴をはくなどの準備ができる。
- ・始まる前の「ラジオ体操の歌」を歌う。
 - 夏休み後半では、ラジオ体操カードの歌詞を見て歌う。
- ・子ども会ラジオ体操のときには、1・2年女児たちと最前列にならんで歌を歌い、ラジオ体操第1、第2の動きをしている。
- ・ラジオ体操の動きが、ほぼ出来るようになった。
- ・体操がおわるとカードに判を押してもらおうが、判の個数に関心をもつ。

ときに数えることもある。

- ・ラジオ体操会場から帰るとき、ほかの子どもたちに合わせて走る。
- ・帰り道に出会うトンボやチョウの名前をいう。母親や祖母に伝える。
- ・ラジオ体操での出来事をめぐって、母親や祖母と会話ができる。

2009年の9月に入ってから、S児の言葉でいえば「友だちと遊ぶ」ことが多くなった。そのころの「S児のお友だち」とは、

- ①お隣の3人きょうだい（保育園3歳男児、5歳女児、6歳女児）、
- ②同じ小学校の1年生の男児と、その弟たち二人、である。

この6人に、S児が加わって、7人が一緒に遊ぶことも多い。

週に1回、3軒向こうのお宅で開かれている子どもたちの「自主サークル」の「お友だち」と遊ぶこともある。ここでは、下は幼稚園児から、上は小学校中高学年、中学生とも遊んでもらうことになる。

3歳児健診を受けたころ、そして祖父母と同居しはじめた時も、言葉の意味が理解できず、泣いたり、暴れたり、見境なく相手に向かっていたり、引っ掻いたりしていたS児であった。ときに、軽度の自傷的な行為も見られた。

しかしながら、3年間の幼稚園生活のうちに、言葉が理解できるようになり、生活習慣が身につくなどにより、落ち着いた生活ができはじめています。

とりわけ、小1夏休みを終えて、2学期に入ると、友だちとの遊びを強く求め、学校でも友だちとの遊びや学習を喜んで取り組んでいる様子である。この時期から、理由のない泣き叫びや、かかとを打ち付けるなどの自傷的な行為も、ほとんどなくなっている。

その陰には言葉の理解と、自分からの言葉が使えるようになったことがある。起床から就寝までの規則正しい生活の中で「定型の言葉」も重視してきた。

- ・起床直後の布団のうえで、「おはようございます」。
- ・家族で食事をするとき、S児の「それでは、みなさん、いただきます」。
- 食事の終わりには、「ごちそうさまでした」。
- ・S児が登校するとき、S児「行ってきます」、家族「行ってらっしゃい」。
- ・S児が帰宅したとき、S児「ただいまあ」、家族「おかえりい」。
- ・家族が「ただいまあ」と帰宅したとき、S児「おかえりい」。
- ・寝るとき、「おやすみなさい」。

以上の「日常の言葉」に加えて、「非日常の言葉」の一つとして「ラジオ体操をめぐる言葉」も、S児の言語生活を強化し、豊かにする役割を果たしてきた。

夏休みのラジオ体操への取り組み2年次を終えてみて、S児の言葉の発達の上に及ぼす大きな力も実感している。

本論を書き終えた今、次の年も「夏休みのラジオ体操」を試みたいとの思いを強くしている。